

令和5年度第1回御前崎市総合教育会議・御前崎市牧之原市学校組合総合教育会議
合同会議録

日 時 令和5年9月27日（水）
午前8時59分～10時20分
会 場 御前崎市役所 3階 301会議室

- 1 開 会
- 2 市長あいさつ
- 3 協 議
 - (1) 令和5年度 全国学力学習状況調査の結果等について
 - (2) 御前崎市中学校部活動の地域移行について
 - (3) その他
- 4 閉 会

出席者名簿（敬称略）

市 教 育 委 員 長	柳 吉 竹 島 松 野 増	澤 村 田 田 林 口 田	重 紳 和 惠 義 智 克	夫 治 郎 世 美 樹 美 之
御前崎市牧之原市 学校組合教育委員				
副 市 長	松 鴨 鈴 齊 鈴 古 鈴 河 坂 澤	下 川 木 藤 木 地 木 原 崎 本 入	充 雅 芳 弘 和 聡 浩 基	利 朗 美 樹 康 隆 明 信 長 裕
総 務 部 長				
健 康 福 祉 部 長				
教 育 部 長				
学 校 教 育 課 長				
社 会 教 育 課 長				
教 育 総 務 課 長				
教 育 総 務 課 課 長 補 佐				
教 育 総 務 課 指 導 主 事				

欠席者名簿（敬称略）

な し

1 開 会

○司会（教育部長 鈴木弘康） それでは改めまして、おはようございます。定刻より少し早いですが、皆さんお揃いとなりましたので、始めさせていただきます。

開会に先立ちまして、挨拶を交わしたいと思いますので、御起立をお願いいたします。それでは、相互に礼。

[相互に礼]

○司会（教育部長 鈴木弘康） 御着席ください。

それでは、ただいまから令和5年度第1回御前崎市総合教育会議を開会いたします。

2 市長あいさつ

○司会（教育部長 鈴木弘康） はじめに市長より御挨拶をお願いいたします。

○御前崎市長（柳澤重夫） 皆さん、おはようございます。つい先日まで、大変厳しい残暑が続いておりましたが、彼岸も明けまして朝夕はめっきり凌ぎやすくなりました。何と言いますか、今年はまだ記録を更新するような猛暑が続きましたが、国連のグテーレス事務総長も、地球温暖化の時代は終わって地球沸騰化の時代が到来したということを書いていましたが、まさにそのとおりでありまして、これからもこういった猛暑が毎年続くのではないかと、大変懸念しているところでもあります。今朝のテレビを見ておりましたら、ブリが北海道のほうでも大量に捕れるということを放送しておりましたが、そういった生態系も大きく変化しているのかなというふうな感じもするわけでもあります。

また今日は、委員の皆さんには大変お忙しい中、この令和5年度の1回目の総合教育会議に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。また、教育委員の皆さんには日頃から御前崎市の学校教育につきまして、格別の御指導と、また御尽力をいただいておりますことを心より御礼申し上げます。

今日のこの総合教育会議は、令和5年度に行われました全国学力学習状況調査の状況、この結果でありますとか、部活動の地域移行、こういったことにつきまして説明を申し上げますので、皆さんで協議をしていただきまして、より良い教育会議になりますことを心から念じて一言だけ、これで御挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくをお願いいたします。

○司会（教育部長 鈴木弘康） ありがとうございます。

3 協 議

- (1) 令和5年度 全国学力学習状況調査の結果等について
- (2) 御前崎市中学校部活動の地域移行について
- (3) その他

○司会（教育部長 鈴木弘康） それでは続きまして、協議事項に入らせていただきます。会議の進行につきましては、市長にお願いしたいと思います。よろしくをお願いいたします。

○御前崎市長（柳澤重夫） それでは早速ですが、今、申し上げましたように、今日の総合教育会議は、この令和5年度に行われました全国学力学習状況調査及び標準学力調査の結果をもとに、御前崎市の教育について、それから中学校部活動の地域移行について、教育委員の皆さんと協議をしたいと思います。

はじめに、全国学力学習状況調査、標準学力調査の結果等につきまして、事務局から説明をし

ていただきたいと思ひます。

○学校教育課長（古地 隆） よろしくお願ひします。学校教育課の古地です。資料を事前に配付させていただきました。なお、前ではプレゼンテーションも同時に流しますので、どちらか見やすいほうで見ていただければと思ひます。なお、本日は中学校の全国学力学習状況調査の問題を国数英と用意させていただきました。これは皆様に解いていただこうということではありませんで、今はこのような問題傾向になっているのだなということて捉えていただければと思ひます。よろしくお願ひいたします。

議会の全員協議会や定例教育委員会等で、本年度4月18日に実施された全国の学力学習状況調査の結果についてはお知らせしたところではございます。本日は、この全国学力学習状況調査や標準調査について分析をし、学校教育課より、市内小中学生の実態の詳細を報告していきたくと思ひます。よろしくお願ひいたします。

全国学力学習状況調査は、対象学年が小学校6年生と中学3年生です。教科は、国語、算数・数学、そして、本年度は4年ぶりに中学校3年生で英語を実施しました。中学校3年生英語の話す分野は、今回初めてオンラインを使用して、各生徒がヘッドセット、ヘッドホンにマイクがついたものをつけて音声を録音した上で、文部科学省のシステムに送信するというスタイルをとりました。アクセス集中を防ぐために、英語については4月18日に全ての学校で実施したということにはならず、5月26日までに分散して行ったという形をとっていますので、御了承、御容赦願ひます。

それでは、まず初めに小学校の結果からお伝えします。赤い枠で囲まれている部分が、令和5年度の結果です。参考までに、令和3年度、令和4年度の数値も掲載しています。

国語は、全国の正答率よりやや低い正答率でしたが、全国と大きな差は見られません。算数について例年、全国の正答率と比べ5ポイント以上の差がありましたが、今年度は例年より1.5ポイントほど差が縮まりました。各教科の問題別正答率の割合は表のとおりですが、国語の思考、判断、表現は、全国とほぼ同様になっています。知識・技能については、全国と比較し、低い結果となっています。もう少し詳しく見てみます。

全国と比べて正答率が低かった問題は、情報と情報を関連づけ、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解して使うことができるかを問う問題が、非常に正答率が低かった状況です。また、小学校については、敬語の理解についても正答率が低いという傾向がありました。今日の問題を見ていただければ、こんなことを聞いているということもおわかりになっていただけると思ひます。

続いて、小学校の算数です。特に正答率が低かった問題は、椅子4個の重さが7キロであることをもとに、48脚の重さの求め方と答えを書くという問題であり、伴って変わる2つの数量の関係が比例の関係にあることを用いて、知りたい数量の大きさの求め方と答えを、式や言葉を用いて記述する問題が、非常に正答率が低かったという結果が出ています。

次に、中学校の結果です。赤い枠で囲まれている部分が、本年度、中学校3年生の平均正答率です。全ての教科とも、今年度については、全国と静岡県とも比較し、低い結果となりました。特に英語が、平均正答率マイナス5.6ポイントと大きく下回りました。中学校のそれぞれの教科を問題別に見ますと、知識・技能の問題と思考判断・表現の問題を比べると、知識・技能のほうが、全国との差がやはり大きいことがわかりました。

国語をさらに詳しく見ていきます。本市の制度は、今までどちらかというて、目的に沿って自分の考えをまとめるとか、根拠を明確にして書くとか、読んで理解したことを知識や経験と結び

つけて、自分の考えを広げたりするという問題の正答率は低い傾向にあったのですが、今回は、比較的に正答率が高い傾向を示しました。反対に、具体と抽象、意見と根拠など、情報と情報の関係を理解するなど、情報の扱いに関する問題の正答率は、低い結果となりました。

続いて、数学です。事象を理想化・単純化することで表された直線のグラフを、事象に即して解釈できるかを見る問題の正答率が特に低い状況です。また、自然数の意味や反比例の意味などを理解しているか問う問題の正答率も低い傾向が見られました。

続いて、英語です。英語は、読み、書く、聞くの中で、特に本市では英語を聞くという力に課題があることがわかりました。例えば、忘れ物に関する情報を得るために、自動音声案内を聞いて最も適切な番号を選択するという問題とか、日常的な話題について、目的に応じて英語を聞いて必要な情報を聞き取ることができるかを見る問題の正答率が低い傾向でした。また、未来表現、be going to の肯定文を正確に書くことができる問題の正答率も低かったです。

続いて、観点別評価からわかったこととして、身につける力、子供たちに必要な力として身につける力を思考判断・表現と知識・技能の2つに分類し、全国との平均正答率を比較したときに、全体的に本市では、知識・技能のほうが、比較的低いという結果になりました。それでは、知識・技能が低いからということで、単純に知識・技能をより重視して授業を進めていく、学習を進めていけばよいのだろうかという疑問が湧きますけれども、そういった考えのみでは、例えば、知識や技能をドリル的に教え込む、そういった教師主導の授業へ逆戻りをする恐れがあると考えております。知識・技能を単純に数値化して、できる、できないということに囚われず、身につけた知識・技能を、本当に使える知識・技能にしていかなければいけないと考えます。知識・技能の学習が覚えることだけになっていないかということ、これから一層振り返るの必要性を感じるところであります。

続いて、この問題を見てください。小学校の問題を今日は用意することが出来なかったのですが、これが今、小学校の国語の知識の情報の扱い方という形の問題になっています。これは、資料を読んで、情報を関連づけて理解して解答を導くという問題であり、単純にいろいろなことを覚えているということだけでは解ける問題にはなっていないということがわかります。方針的に答えを導く敵な知識・技能だけでは、全く解けないというような形になっていて、私たちの授業感ですとか、そういったことを見つめ直すことにもつながっております。

今度は、中学生の国語の問題です。この問題は、資料の中にもあります。これが1番正答率の低かった問題にはなるのですけれども、やはり情報と情報を関連づけさせる。1つの情報だけではなくて、いくつかの情報を関連づけさせて、単純に具体と抽象という言葉を知っているだけということではなくて、記号を選ぶ問題なのですけれども、アからオ、この文章の中にアイウエオがあるのですが、こういった文章の前後を関連づけさせて答えていかなければいけないという問題になっております。知識・技能のとらえ方を変えていくことで、授業や家庭学習の取組もやはり変わってくるのではないかなと考えています。例えば、よく昔から、私たちも経験はしているのですけれども、1ページ学習といって、家に帰って漢字を100字書く、家に帰ってノート1面に単語を書くというようなことをしていたわけですけれども、そういった文法などを覚えたり、漢字をたくさん書いたりすることも大事なかもしれませんが、そういったことだけで知識・技能をとらえてしまうということを危惧しているところでもあります。大事なのは、漢字を覚えるということではなくて、覚えた漢字を文章の中に適切に使えるか、文章の中で文法の知識が生かされているかというようなことが大切になってくると思っております。

続いて、小学校の算数です。これは、非常に私も随分変わってきているなということを感じた

問題にはなっています。表からデータを読み解き、条件に合う数を回答する問題ですが、これも知識・技能を問う問題です。単純に計算することだけでなく、使える知識を組み合わせるということが求められます。

続いて、中学校数学の問題です。これは、直線のグラフを条件に即して解釈できるかを問う問題です。単純に計算ができているということにとどまらず、グラフを読み解き、読み解いた知識をさらに活用するということが求められております。これは、A4の1枚に収まっていますが、問題を見ていただければわかりますけれども、A4の2ページに渡って、これが出されているというような傾向にもなっております。数学における知識・技能は、計算を覚える、公式を覚える、図形・グラフの書き方を覚えるということだけで終わっていると、それはもはや知識・技能とは言えないということになります。解き方を覚えるだけでなく、その意味を理解し、さまざまなことに活用できることが、本当に使える知識・技能となっていくと思います。

続いて、英語です。この問題も、知識・技能に関する問題です。単語の意味やスペル、文法などを覚えるだけではなかなか解けない問題となっています。会話の流れから正しいグループを用いることができるかを問う問題の平均正答率は、かなり本市の場合については低かったです。英語における知識・技能ですが、やはり漢字の1ページ学習同様、単純に単語の意味やスペル、文法を覚えるだけでは、使える知識・技能とはなりません。それらは全て、今後は、自動翻訳機やAIが対応することになっていくと思われまます。決まった英文を音読するだけでなく、目的や条件を踏まえて聞き取ることができるような力を身につけていくことが必要です。

変化の激しい社会の中で、子供たちが身につけるべきは、覚えていけば良い知識・技能ではなく、使える知識・技能になってくると思います。だからこそ、教師が知識や情報を一方的に伝達する授業から、子供自身が学び、子供同士で学び合う授業へ変えていかなければいけないということを強く感じます。また、教師の説明を聞いて覚えるという授業から、子供たちが自ら自分でやってみる、覚えたことを使ってみる授業へ変換していくことが必要です。これは、本市における授業改善の一端としての紹介をしている記事になります。右の写真は、今年の3月に全国誌である内外教育というものがあるのですが、その内外教育に上智大学の奈須教授が寄稿した記事に、浜岡東小学校の実践が取上げられました。要はタブレットを用いて、単元によってはいろいろな時数があるわけなのですが、1時間目から10時間目まで、その単元というものがあります。それを、自分のペースで、自分のやりたい方法で授業を進めており、全ての児童が生き生きと取り組んでいるというような紹介をいただきました。やはり、他者と協働して学び合う姿であったり、個人で自分のペースで課題解決をしたり、いろいろな学び方があるという授業展開を進めていくことが、全国誌でも取り上げられました。

続いて、全国学力学習状況調査、生徒質問紙調査や標準学力調査、i-checkから見る児童生徒のあらわれについて、お伝えいたします。

まずは、ICT機器の活用について説明いたします。この表、グラフは、全国学力学習状況調査、児童生徒質問紙調査の数値になります。授業でICT機器をほぼ毎日使用すると答えた児童生徒の割合は、小中学校とも全国と比べ非常に高い数値となっております。そして本年度、小学校1、2年生にも、Chromebookが導入される予定であり、本市の児童生徒のICT活用がますます推進されそうです。全国学力学習状況調査が、今後、タブレットを使用しながら実施するCBT化されます。文部科学省では、令和7年度以降、できるだけ速やかに中学校から先行導入する予定です。ということは、現在の中学校1年生は、中学校3年生になったときの全国学力学習状況調査は、Chromebookを使って全て答えるというような形になっていく可

能性がとても大きいです。その後、小学校も順次実施するということが伝えられていますので、そもそも、もうICT機器、こういったChromebookは使えることが前提で学力調査が行われていくために、数値についても、100%に近づけるよう積極的な活用が今後必要になってくるのではないかなと考えております。まだまだこれに満足せず、100%に近づけるようにしていきたいと考えます。また、文房具のように使用するということだけにとどまらず、子供たちが、使うことでやっぱり効果的であるとか、得だなと思うようなことが実感できるような活用が求められます。

ここで、小学校における効果的な使い方であった事例を2つ紹介したいと思います。1つ目は左の写真ですが、学校で見つけてきた生き物、校内に生きるいろんな生き物がいるのですが、タブレット上にある学校の地図に、それぞれがタブレットに記すことで、最終的には1つの校内の生き物図鑑ができるというような授業が行われておりました。この隣の写真ですが、算数の作図を先生の動画を見ながら学習しています。今までは、こうやって作図をするのだよというような形で、先生が一斉に説明をしていたわけですが、子供たちが、自分のペースで、やりたいときに学習を進めることができるということになります。

また、写真にはありませんけれども、中学校では、他市の中学生や高校生とオンラインでダイレクトに話し合って授業を行うというようなチャレンジもしてくれていました。紹介したものは一部分であります。ICTを活用した授業は、今後ますます求められると思います。

続いて、本市スクラムスクール運営協議会で取り上げてきた早寝早起き朝御飯、基本的な生活習慣の定着について御説明いたします。まずは、早寝についてです。これは、標準学力調査、小学校2年生から5年生、中学校1年生、2年生のi-checkから、平日の月曜から金曜まで、夜10時までに寝る児童生徒の割合を示したものです。本市の児童生徒が、夜10時前に寝ている割合が非常に高いということが分かりました。続いて、早起きについてです。朝に、同じ時間に起きている児童生徒が、全国とほぼ同等の数値となりました。自分で起きている、いつも起きている、大体起きていると合わせた結果ですが、そういった自分で起きていると答えた児童生徒が、全国と比較して、やや低い結果となりました。続いて朝ご飯についてです。同じく標準調査でのi-checkの結果から見ますと、毎朝、朝御飯を食べている児童生徒の割合は、全体の8割程度であり、全国と比較すると、同等か、やや高い結果となりました。朝食と学力調査の結果の相関ですが、図のように学力調査の結果は、正答率の高い上位の児童生徒ほど、やはり朝食を食べている習慣が定着しているという傾向が見られております。

続いて、メディア利用に関することについて、お伝えいたします。標準調査i-checkの結果、御前崎市の児童生徒が、全国の児童生徒よりテレビや動画、ゲームなど、メディアにかかわる時間が長いことがわかります。続いて、スマホや携帯電話などメディアへのかかわり、毎日SNSでやりとりをしているかどうかという質問ですが、これは、本市小学校の児童は全国と同等であるものの、中学生になるとその割合は全国よりも大きく上回っています。

これまでのまとめになります。学習面では知識・技能に課題が見られるものの、単に知識や方法を覚えるということだけでなく、獲得した技能や、知識や技能を活用できる授業づくりを進めることが必要です。ICTを更にやはり活用して、効果的な授業について研究を進めていきたいと考えます。また、睡眠や朝食については、非常に意識が高いものの、今後も重要性を家庭や地域に発信していきます。また、メディアの利用については、自己管理能力の育成を図り、主体的に考える子供をやはり育成するということにつなげていきたいと考えます。

以上、学校教育課からの報告を終わります。ありがとうございました。御意見をよろしくお願

いたします。以上です。

○御前崎市長（柳澤重夫） ただいま、学校教育課から、学習状況調査、またそれに伴って分析等の説明もございました。委員の皆さんから全体を通しまして、さまざまな角度から御意見をいただければ大変ありがたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。積極的にお願ひください。

○教育委員（竹田和世） いいですか。

○御前崎市長（柳澤重夫） はい、どうぞ。

○教育委員（竹田和世） 全体的に、全国よりは少し低めというところは、あまり変わっていないのかなとは思ひます。で、そこを上げていくっていうのに、方法としては、私立で行っているような習熟度別のクラスを設けるとか、そういうことがあるとは思ひます。でも、私的には学校というところに、人間力を育てるところだということをおもひますと、やっぱりコミュニケーション力であったり、できない子に教へてあげたりとかいう心の面もすごく大事だと思ひますので、そこは強くは思ひないのですけれども、ただ、英語に関して数値が低かったというのは、とても気になるところです。それで、この地域のように田舎というところと、都会というところの日常生活で積み上げてきたものとは、絶対違ふと思ひます。例えば、新幹線に乗っても、案内が日本語で流れたとか、英語で流れたとかということ。この間、私、他市の大型商業施設に行つたのですが、トイレの使用法も、英語とか何か国語もありました。やっぱり田舎の子は、そういうものに触れる機会や、電車に乗る機会も少ないですし、小さなころから積み上げてきたものというのは、どうしても大きいのではないかなというところも感じます。聞くという単位について低かったということは、ALTの先生の存在にこれからすごく重きを置いて、お願ひしていかなくてはいけないところかなと思ひます。先日、辞められたのでしたか。その補填は、どうなつていますか。

○学校教育課長（古地 隆） 今、補正予算で上げさせていただきました。

○教育委員（竹田和世） やっぱりネイティブな言葉を聞くということに触れていくことは、本当にとっても大切だと思ひますので、早く対応してほしいなと思ひます。先日、池新田幼稚園に行つたときに、幼稚園には外国籍の子供さんがたくさんいらつしゃって、マリア先生という3か国語を話せる先生が6月までいらつしゃって、7月からお父さんの体の具合が悪くなつて帰国されたという話でした。言葉の壁はないですかと聞いたら、やっぱりすごくありますと言われました。じゃんけんとか鬼ごつことか、言葉がなくても一緒に遊ぶことはできるけれども、やっぱり言葉の壁はありますということをおもひました。あと、この前、小笠東小の保護者さんとお会いしたときに、同級生のクラスメイトの名前が3分の1ぐらいカタカナなのですよと言われていて、その区域はとても外国籍の子が多くなつているそうです。だから、テストをやつたときに全国的に順位が低いだとか、そんなことは別にいいです。けれども、そういう子たちに対して、少しずつ言葉の壁をなくしてあげないと全体的に伸びていかないということだと思ひます。池幼の子のことも思つても、これから小学校に上がっていくわけですし、勉強面だけじゃなくても、コミュニケーション、人間関係や人間力を育てるという意味でも、マリア先生に代わる先生を早く見つけてあげてほしいなと思ひました。

それから、2020年でしたか、指導要領が新しくなりましたよね。それで、3、4年生は英語に親しむ。だから、ゲームをやつたり遊んだりとかを楽しくできる。5、6年生が成果になつて、成績がつくようになった。お母さんたちに言わせると、そのギャップが大きいようです。だから、小学校から英語嫌いな子を作らないような、何か施策というか、3年生、4年生はすごく楽しかった。お遊ばしをいっぱいしてきて楽しかったのに、そこに来るといふギャップがちょっと生まれ

てきているようなことを感じると言われていましたので、そこら辺も大きいのではないかなと思いました。それから、中学1年生の英語の点数がすごく下がっています。5、6年生が、600から700単語を小学生のうちで覚えていく。それが、中学校の教科書になると、小学校で習った単語は覚えてきて当たり前の体での進め方になっているところも、今の中学生はすごく大変なようです。だから、小学生の専任の英語の先生がなかなかやっぱり大変だと思うのですが、これを見て、英語力を上げていくというところの、いろいろな施策というのはあるのではないかなと思いました。

アンケートのほうもいいですか。ちょっと愚直な質問ですけど、孫がいるものですから、自分で起きることができるという質問をどうしたのと聞きましたら、私、だっていつも目覚ましで起きているもんと。ふと私も我に返ったときに、朝が来たから自然に起きられる子が、これは目覚まし時計で起きるといのは、自分で起きることにならないのかしらと思って、その辺のアンケートの徹底がどうなのかということをちょっと思ってしまいました。

○学校教育課長（古地 隆） 1つ1つの質問に対して、今、委員がおっしゃられたようなことを解説しているわけではないので、そういうこともあるかもしれません。

○教育委員（竹田和世） 私も孫の言うことを聞いて、はっと思いました。すみません。以上です。

○御前崎市長（柳澤重夫） ありがとう。はい、どうぞ。

○教育委員（増田克之） 学習状況調査を見させていただきまして、問題自体が、やっぱり知識・技能を生かしていく問題が増えたなということを感じました。我々の頃は、結果のほうで書いてあるのですが、覚えれば良い知識・技能が、我々の受験の頃は多かったんですね。でも、情報や知識・技能を生かしていくという問いが、非常に多くなっているなと感じました。これが、今、狙っている学習の傾向なのかなと思います。それで、ここで、教育委員会事務局で考えている今後の取組の方向はやっぱり大切かなと思います。今、調査は3教科ですけども、あと社会や理科に関しても、やっぱりそういう知識やグラフ、そういうものを総合して、統合して、結論なり、求めて解決していくというものがかなりあるはずですよ。それは、私が現役で教員をやっているときも問題の中にいくつかあって、これはこう考えればいいのではないの、この辺を組み合わせるといって、ああ、そうかという子供たちもいました。ですから、多分、社会、理科を見てありませんけども、そういう傾向の問題、学習が変わっていくのではないかなと思います。ぜひとも、知識・技能を生かし、そして、生かす学習をして結論を導く、そのような学習をこれからも力を入れていただきたいと思っています。

それから、ICTですけども、やはりこれからは絶対欠かせないもので、今、生成AIというものもいろいろ問題になって、新聞等でも取上げられていますけども、その辺も事務局が中心になって、各学校でうまく子供たちに活用できるような方向で、指導を進めていただけたらと思っています。

それから、早寝早起き朝ご飯ですけども、これは、スタートのときに私も少し関わっていたものですから、当初から比べると、かなり数値も上がってきて定着してきているなということで、非常にうれしく思っています。これにはやはり、園から小学校、中学校、それぞれの学校で取り組んで理解していただけてきたのですが、それと同時にやはり保護者の皆さんがそれを理解くださって、実践してくださっているということが非常に嬉しく思います。子供たちのことを考えて、家庭でも一生懸命やってくださっているというのが、この定着になっているのだなと思っています。本当にまだまだ大変なことは幾つもあるかと思いますが、これからもよろしくお願ひしたい

など思っております。以上です。

○御前崎市長（柳澤重夫） はい、ありがとうございます。そのほかにいかがですか。はい、島田さん。

○教育委員（島田恵美） お話も聞いて、ICTの利用により知識や技能が身につく授業づくりの大切さというのを本当に感じています。学校訪問に行って、短時間ではありますけども授業を見させていただいて、本当に他者との学び合い、個人の課題の利用にすごくよくICTを使っていて、高学年はもちろんですけども、低学年の子供たちも、本当に私ではできないかもしれないというくらい、うまく活用していたのにびっくりしたのですけれども、先ほど写真のありました東小かなと思ったのですけれども、本当に虫の位置をやるというのを実際に見せていただいて、子供たちもやりながら本当に楽しそうで、勉強に向けての意欲というものを感じました。

今、学力調査の説明を聞きましたけれども、結果も数値として表れて大切なことだとは思いますが、でも、今は変化のときで、これからの御前崎市の学校にまた期待をしていきたいなと思えました。全国的にも宿題は、夏休みの宿題や日々の宿題もなくなってきているという傾向にありますけれども、本当に宿題をする生徒のほうがこの学力が高いっていうのも明らかになっていることではありますけれども、自主的に取り組む姿を育てるためには、やはり宿題というものにとらわれずに、考えを変えていく、時代に合わせてアップデートしていく必要をこの頃感じています。ニュースとかでもそうですけども、保護者や大人のほうがその考え方に着いていけないということが多くなってしまうので、そういう保護者への説明も、子供を通して理解していただきたいなと思えます。さらには、新しく教員を目指す若い人たちにも魅力あるものになってほしいなと思えます。以上です。

○御前崎市長（柳澤重夫） はい。ありがとうございます。どうぞ。

○教育委員（松林義樹） 先にちょっと質問ですけど、今、ここで出ている結果が中3と小6のものがあるのですけれども、小学校4年、5年のときの、または中学校1年、2年のときの、この子たちの成績というのは揃っていますか。やはり、全国に比べて低いのですけれども。

○学校教育課長（古地 隆） もちろん経年では比較はしております。大きなその差の変化というものは、あまりありません。

○教育委員（松林義樹） 大体同じような学力で推移してきているということですか。

○学校教育課長（古地 隆） そうですね。ときには学年によって、標準調査も上がったたりだとか下がったりだとかというような傾向が見られることはあるのですけれども、劇的に伸びたとか劇的に落ちてきたとかという傾向は見ることはありません。ただ、学年によって、やはり下がったり上がったりするものですから、そういったときにはやはり、授業のあり方などが何か影響しているのではないかというようなことは考えます。

○教育委員（松林義樹） これまで中学3年生は、全国レベルがちょっと高いかというような結果が出ていたのではないかと思うのですけれども、この学年の子というのは、やはりそのあたりは以前から沈んでいたのですか。

○学校教育課長（古地 隆） こればかりは、問題の傾向とかそういうこともあるものですから、一概には何とも言えないのですけれども。今年の中学校3年生は、去年と比較すれば大きく下がっているという傾向が出たということなのですが。

○教育委員（松林義樹） それこそ、今、課長からの説明で、知識・技能のとらえ方を変えなくてはいけないという話があったのですが、本当にこの問題が知識・技能なのかなと、自分が現場に行っていたときのことを考えると、ええと思ってしまったのですけれども、本当にその活用して

いく力というものを、どのような形で授業に取り組んでいったらいいのか。

この辺の成績が高い地域の県の授業でこんなことをやっているよという見本となるようなもの、また御前崎市も取り入れていきたいなというようなものが、どこか見当がついているのかというか、目指すところ、目指す授業というものが各学校に下りているかな、どうなのかなということをお聞きしたいなと思っています。

○学校教育課長（古地 隆） 原則的には、やっぱり子供に委ねて授業を進めていくということは、本市が今、目指しているところで、研修主任、校長会も含めて話をさせてもらっているところです。そしてICTの活用状況が非常に高いということ、これは本市の強みでもありますし、こんなバックアップをいただいているところはないと思っていますので、そういったことを先ほども言いましたけれども、全面的に前に出しながら、そういったことを使いながら、さらによりよい効果的な学習というものを進めていければとは思っております。ただ単に使うだけじゃなくて、本当に子供たちが使って、やってよかったなというような実感まで高めていかないと、やはりなかなか100%は。それから、教員もどちらかという今までペーパーで、黒板で授業をしていた教員が、これを導入したときに非常にアレルギーを起こしたというケースもありましたけれども、教員自身も、今、これを使い始めて、こんな便利なものはないというようなことで、今、少しずつ少しずつ前に進んでいるところではありますので、そういった強みも大事にしながら、本当に子供たちに委ねる授業、そういったものを型ではなくて、それぞれの子供も教員も、そういった思いを共有して授業を進めていけるように、主体的にやっぱり子供たちが進めていけるような、そんな授業をしていきたいなと考えております。どうしても、市で統一するだとか、学校で統一するだとか、こういった型にはめてやろうだとかというような傾向にはなってしまうのですが、本来そういうものではないですし、そういった型にはめることによって、子供の主体性を伸ばしていけることは少ないのかなとも思っています。非常に今までの授業観であったりとか、指導観であったりとか、そういったところと私たちのギャップといいますか、そういうところを戦いながらやっているものですから、非常に難しい部分も感じるところは事実です。

○教育委員（松林義樹） もう本当に、各学校の授業を見させてもらっていると、Chromebookを使って、本当に子供たちが意欲的に、または自分がわからないようなこともどんどん打ち込んだり、調べたり、グラフ化したりしている授業を見ていると、すごく進んですばらしいなと思ったのですが、その中で実際にそれではどれだけの力がついているのか。または、教員はそれを活用させているのだけれど、本当に何の力をつけるように使わせているのかという細かなところまで、必要になってきているのだろうか、または難しくなっているのだろうかということを感じました。

あと、最後にですけど、知識・技能を活用する力を、今、すごく求められている。そうやってきていると思うのですが、基礎基本みたいな我々が言っていた知識・技能を身につける。やはり、それがないと上の段階へ進めないですね。そのの、教え込むというような言葉で話がありましたけれど、ドリル的な学習だとか、基礎基本をきちんと繰り返して覚えていくというような部分を疎かにもできないのではないかなと思うのですね。その辺のバランスという部分ね。学校と家庭といろいろなところで連携しながら進めていかななくては、こっちはもう家庭に任せたでは、なかなか家庭の保護者も困惑してしまうのではないかと思いますし、これは本当にこれから難しいことはうまく連携をとってやっていかないとできないのだということは感じました。以上です。

○学校教育課長（古地 隆） ありがとうございます。上智大学の奈須先生がこんなことをおっしゃっていました。先生方、大学生のときによく掲示板を見ませんでしたかと。それは、休校か

どうか、よく確認していませんでしたか。それって自分で情報を取りに行っていたでしょう。そういう子を育てないと駄目ですよと言われたのですよね。ああ、そうだなあと思ひまして。結局、こうやって教室の中で座っていて教員が言うことを一方的に受けるだけの様な形ではやっぱり駄目ですし、でも、今、松林委員がおっしゃったとおり、ときには本当に英語が好きで海外に行きたいと思えば、個人的に単語を覚えなければいけないということもあるでしょうし、そういったバランス、時間、タイミング、そういったものをやっぱり自分で選択できるような子供たちに育てていきたいというのは、これはちょっと夢になってしまうのかもしれませんが、でもそういった子供たちを育てていかなければいけないなと感じています。

○御前崎市長（柳澤重夫） よろしいですか。

○教育委員（竹田和世、増田克之、島田恵美、松林義樹、野口智美、松下充利）

[そのほかの意見等は特になし]

○御前崎市長（柳澤重夫） それぞれ、今、委員の皆さんから話がありました。また学力の問題、知識・技能、英語の話もありましたが、本当にどの声もこれからの子供たち、これから社会へ出す子供たちにとっては、大変重要な提言であったと思っております。竹田さんも英語に触れる機会と言いましたが、なかなかこの田舎では英語が街にありませんので、実際触れる機会もないのですよね。ですので、ALTでありますとか、子供たちはそれ以外ないと思うのですよね。それから塾に行っている子供もありますので、そういったお声がいっぱいあると思ひますが、御前崎市でも英語に触れてほしいということで、国際交流事業を使って海外へ行っておりますが、ただ、行って2、3日で覚えるわけにはいきませんので、これは実際に会話できるまでにしないと、なかなか通用しないと思ひますので、先ほどおっしゃった小学校で単語が600ぐらいですか。中学生であれば少なくとも2,000か3,000あるのかな、単語は。そのぐらいは中学生で覚えないと、なかなか英語力、英語で話すことは出来ませんので、まず子供たちが単語を覚えるということが大事じゃないかなと思ひます。会話の前に単語を覚えるのは大事だなと、そんなふうにも思ひます。これからの社会を生きる子供たちには、大変この英語力が大事でありますので、そういったことも学校教育の中で取り組んでいただければ大変ありがたいと思ひます。

それから、コミュニケーションはもちろんそうありますが、そういったことも含めてやっていただきたいと思ひます。それから、増田さんからも、知識・技能、こういったことを身につけるといふことで、ここにもありますが、思考力、判断力、こういったことも、子供でももちろん大事ですが、特に社会人になって、今、お話にありました知識ですとか技能といったことが、当然、社会人になってから、社会が求める創造性、物を作り上げていく創造性、それをいろいろなことに変えていくような想像力といいますか、そういったことにもつながりますので、テストをやる前に様々なことを考えながら、いろんな角度から考えながらその勉強に取り組むという思考力といいますか、判断力といいますか、創造性といいますか、そういったことも、ちょっと必要じゃないかなとも感じたところであります。

また、島田さんからのICTも、もう県内でもトップクラスだと思うのですよね、このICT教育は。そういった意味では、島田さんがおっしゃったように、もう時代も大きく変化していますので、これからはICTを取り上げる時代が来ると、今、既にそうですが。そういうことになりますと、とにかく子供たちには、さらにこのICT教育を進めてほしいと思ひます。実際のところ、タブレットの子供の操作を見ておますと、とても着いていけないですよ。もう、ピアノを弾くように子供たちはやれますので、とても着いていけません。これからもICT教育、デジタルが、特に子供たちには必要だなと思ひますので、先進的な取組として学校でもぜひ取り組

んでいただきたいと思います。

また、知識・技能について、今、松林先生からもお話がありましたように、本当に学力は学年によって、毎年、多少の変化がありますが、知識でありますとかそういったものは、もう常にどの子供たちもすばらしい知識と技能、判断力でありますとか思考力といったものを身につけて、上の段階へ上がっていくというようなことをしてほしいなと思います。小学校の段階では、これだけの能力、判断力、思考力、またこうしたものを身につけて、中学校までの分、それから中学校を出るときにはこれだけは身につけていたい、そういった段階的なものをしっかりとやっていく必要があるなと思います。私、いつも申し上げるように、社会人になったときに御前崎の子供ってすごいなと、そういった子供になってほしいなと思います。それは、学力もちろんそうありますが、そうでなくてコミュニケーション能力でありますとか、創造性でありますとか、判断力でありますとかですね、忍耐力でありますとか、よく言うレジリエンスを身につけた子供をぜひとも御前崎の教育の中で育てたいと思っておりますので、また教育委員の皆さんも、そういった考えをお届けいただければ大変ありがたいと思っております。よろしいでしょうか。

○教育委員（竹田和世） はい。

○学校教育課長（古地 隆） ありがとうございます。

○御前崎市長（柳澤重夫） それでは次に、2番目の御前崎中学校部活動の地域移行につきまして、説明をお願いしたいと思います。

○教育総務課指導主事（澤入基裕） 教育総務課の指導主事をしています澤入といいます。よろしくお祈いします。私からは、中学校の部活動の地域移行の現状について報告をさせていただきたいと思ひます。よろしくお祈いします。御手元のほうに資料を御用意させていただきましたので、少し小さい字になってしまひますが、見ていただきながら聞いていただければと思ひます。よろしくお祈いします。

まず、令和3年度から、国のほうでは中学校の部活動のあり方について議論がスタートしました。令和4年度になって、地域移行に関する提言というものも発表されています。この議論の中では、これまで中学校の部活動が果たしてきた意義が確認されるとともに、課題として、少子化に伴う生徒数の減少により持続可能な活動が困難になってきているということ、教師にとって部活動指導が大きな業務負担になっているということ、地域との連携が不十分であることなどが挙げられてきてお祈います。

御前崎市の現状としましては、少子化がかなり進んできている現状があるのかなというふうに感じています。また、牧之原市の学校再編に伴って、御前崎中学校に通う生徒の数が減少することが予想されています。実際に部活動の加入数の推移を見てみますと、今までたくさんいた部活動の人数ですが、かなり減ってきている現状があります。特に、現在ですが、御前崎中学校、浜岡中学校ともに、ソフトボール部の人数がかなり減ってきているということがあります。浜岡中学校については、3年生については県選抜に入っている子もいて、全国で活躍してきたという子もありましたが、現在は1、2年生が新チームになって3名しかいない現状もあり、御前崎中学校と合同で活動をするという形になってきています。

また、ほかの部活動についても、御前崎中学校女子バレー部ですが、県大会で上位等にも入っていましたが、現在は、チーム単独で活動するというのが非常に困難な状況になってきてお祈います。

また、御前崎中学校のサッカー部については、現在の2年生が1人もいないということで、1年生がたまたま23人と、どっと今年入ってくれたものですから、活動は出来ているのですけども、

そういった現状というものも出てきています。

次に、中学校の先生方にとってアンケートになります。これは、昨年度とったものになりますが、部活動の現状についてどうですかということについて、負担を感じているという先生が半数以上いるということもわかってきました。

こういったように少子化の問題、学校の働きかけ、先生方の働き方の問題っていうのは、国が言うとおりに、国が全国的に同じようなことが起きているという現状もあります。そこで、国が提言を出してきているわけですが、国が目指す姿として挙げているのは、こちらのようになります。少子化の中でも、将来にわたり我が国の子供たちがスポーツや文化に継続して親しむことができる機会を確保しましょうということ。あとは学校の働き方改革を推進し、学校教育の質の向上を図っていきましょうということ。地域の持続可能で多様なスポーツ、文化環境を一体的に整備し、子供たちの多様な体験機会を確保するということが、国からは提示されています。

具体的に、改革の方向性としては、まずは、休日の部活動を段階的に移行しましょうということ、令和5年度から3年間を推進期間として進めていきましょうということが挙げられています。イメージとしては、今まで学校で画一的に指導をしてきていた部活動が、習い事、子供たち自身が自分で活動を選択していくという形に変わっていくのかなという形になります。また、令和7年度末までが推進期間ということで、令和8年の夏、中体連ぐらいまでは、活動を維持していくことはできるかなと思いますが、それ以降の活動について検討していく必要というのがあるのかなと思っています。どのようにして、スポーツ機会、文化活動を確保していくかということ、先生方の働き方改革を進めていくこと、地域との連携協働をどのように進めていくかというのを検討する必要があるのかなと感じています。これらというのは、国が一体的にこうなさいということではなくて、地方公共団体独自に、自治体ごとに活動を検討していきましょうと言われていきます。なので、いろいろな市町で検討されているわけですが、前にも示したとおり、いろんなパターンが進められています。行政主導であったりとか、総合型スポーツクラブが主導になったりとか、企業が進出をしてきて企業が主体となって動いたり、そういった活動等が検討されているところです。こういったことで、御前崎市としては、昨年度、令和5年2月に第1回検討委員会を開催させていただきました。そこで上げられた期待の声としては、教職員の働き方改革が進むことで、教育の質の向上ができるのではないかな。多様なニーズへ対応することができるのではないかな。専門的な指導を受けられる可能性があるのではないかな。企業は、この地域移行に参画することによって、活動の幅が広がったり、金銭的な支援を受けられたりするのではないかな。新たなスポーツ・文化活動が創出できるのではないかな。地域とのつながり、そういったところが充実していくのではないかなといったところが期待として挙げられました。一方で、不安の声として上がったのは、家庭の負担。具体的に言うと、送迎面、あとは金銭的な負担、こういったところの負担が増えるのではないかな。御前崎というこの田舎というところもありまして、指導者の確保ができるのかという問題点。特に専門家がきちんと確保できるのか、安全安心面の確保はできるのかというのが話題に上がっていました。あとは人数の確保ということで、少子化が進んでいる中で、市内の子供たちだけで持続可能な活動を進めることができるのかどうか。あとは、スポーツや文化に触れ合う機会。今までは部活動に入ることが当たり前のようになっていた中で、自分で選択をするというときに、なかなかスポーツ、文化に触れ合うということを選択しないで、家で、自分で活動をしていくというときに、そういう（触れ合う機会がない）ところが進んでしまうのではないかなということ。あとは、放課後の過ごし方。そういったところはどうなっていくのか。あとは先生方からあったのですが、休日だけ移行して平日は自分たちでやるということは、

はたしてどうなのかということも不安としては挙げられました。

そういったことを踏まえて、ここまで動いてきたことになりませんが、教育委員会内での話し合いだけではなくて、先生方の代表に入っていたり、検討委員会、地域の代表の方に話に入っていたり、御前崎市は振興公社もありますので、そういったところの方に入っていたり、スポーツ協会、文化協会の方に入っていたりということで話し合いを進めてきました。また、希望する少年団に向けて説明会を行ったり、今、御前崎ライオンズクラブが非常に興味関心を持っていただいている、私のほうで参加させていただいて、一緒に意見交換をさせていただいたりということもあります。また、部活動の自由加入制度の実施や、モデル事業の実施も進んでいます。部活動の自由加入制については、今年度から自由加入制というのを進めているわけですが、今までも自由加入制と言いながらも基本的に加入する、加入を推奨するというシステムでしたが、今年からは自由ですよということを、昨年度の新入生説明会で説明をしました。実際に、御前崎中学校では30名程度、浜岡中学校で10名程度の子供たちが部活動に入らないという選択を、今、しています。モデル事業については、現在、吹奏楽部、浜中と御中の合同部活動、ここに専門家の方が来てくださって、月1回程度の指導をしてくださっています。また、ソフトボール部の人数の減少に伴って、御中と浜中の合同部活動を実施しています。これについては、ICTの活用ということで、練習を始める前にオンラインでミーティングをしてから、それぞれの学校で練習をしたりとか、土日は集まって練習をしたりとかというふうに工夫をして活動を進めています。また、バスケットボール部については、バスケ教室を御前崎中学校の教諭のほうで今進めてくださっていて、こちらについては、小中の合同や他市町からの参加も可能ということで進めています。30名来ればいいかなという話をしていたのですが、1回目から30名も集まってしまい、2回目は30名を超える勢いということで、掛川市の原野谷中という掛川市一番北部のほうからも何名か参加をしたいということで希望があったということで、かなりニーズがある状況です。サッカー部については、現在検討中ですが、少年団と中学校の連携、これを専門家の指導によって進めていけたらということで、現在相談をしています。こういった中で、各市町がどのような話し合いを進めているかということになりますが、近隣の掛川市、菊川市については、スポーツ協会等が主導になりながら、総合型スポーツクラブへの段階的な移行というのを、今、検討しているところになります。掛川市は国のモデル事業にもなりまして進めているところで、掛川市の地域クラブというものをスポーツ協会と協力して、設立をしています。これはスポーツに限らず、文化のほうも進めています。ほかには藤枝市なんかは、エリア制部活動というのを先行はじめています。これは近くの学校同士で、藤枝市であれば、藤枝の瀬戸谷中学校、藤枝中学校等が合同になって活動をする。これらは比較的自転車で行き来がしやすい距離にあるので、学校が終わってから移動をして、違う中学校のグラウンドで活動するとか、そういった活動を進めています。焼津市は、市での地域クラブの設立が進んでいます。牧之原市は、学校再編に伴ってということも踏まえながら、義務教育学校を中心とした活動ができないかということも検討しています。

こういった活動の中でこれから、では御前崎市としてはどのような活動を進めていくのかということ、まちづくりとしての地域部活、子供たちの活動をどのように保証していくのか。子育て支援、あとは持続可能性、生涯スポーツ、文化活動、経済活動の活性化、そういったことを考えた地域クラブ、地域活動というのを考えなければいけないのではないかとこのように考えています。

先週、9月19日には第2回の検討委員会を開催しました。今、言ったことを紹介しながら検討

していただいたところですが、地域とのつながり、御前崎市の特色を生かした活動を進めることが重要ではないかというところがかかり出てきました。例えば、御前崎であればマリンスポーツが盛んであるとか、浜岡であればゴルフ場があったり、ゴルフクラブがあったり、ボーリング場がある。そういったことを使った地域資源を活用した活動はどうだろう。あとは、少年団が熱心に活動してくださっているの、そういったところとの連携を進めたらどうなのかということもあります。あとは、釣りや、サーフィン、パソコン、料理、そういったことを地域と連携をしながら、活動を充実させていくこともありましたし、よくサッカーのJリーグのクラブなどが活動してくださっていますが、ネクスタフィールドといった環境面も充実をしていますので、そういったところをうまく活用できるような連携をしていくのもどうか。1つ話題になったのが吹奏楽です。これは、楽器等の問題や、活動場所という問題もあります。吹奏楽団はあるのですが、うまく活用して連携をしながら活動ができるようになったらいいのではないかと。放課後児童クラブというものもありますが、こういうところの活動としては小学校低学年が利用しています。高学年になると塾や習い事で、そういったところを活用しないようになってきますが、こういった地域クラブが小学校高学年と一緒にやるっていうこともできれば、放課後の児童クラブのような活動としても機能するのではないかとということも話題に上げられました。あとは、持続可能性という面では、指導者を継続して確保する仕組みであったりとか、入る環境をなるべく敷居を低くしてあげたりすることが必要ではないかということ。あとは、大学生の活用や、所属した地域クラブで頑張っている選手が、将来的に指導者になってくれるようなサイクルが出来たらどうか。団体種目の継続が、今後、困難になり課題になってくるようなことも予想されるので、種目によって運営主体というのでも検討していく必要があるのではないかとということが話題になりました。まちづくりとしてどのようにしていくかという視点では、地域の企業とコラボして活動を充実させていく必要があるのではないかとということも出てきました。

いろいろな課題が現在ある中で、今後、子供たちのために、御前崎市の未来にとって、どのような活動がいいのかということも今後検討していきたいと思っていますので、また御意見等いただければと思います。よろしく願いいたします。以上になります。

○御前崎市長（柳澤重夫） はい、ありがとうございます。ただいま、事務局のほうから、地域移行につきまして、方向性につきましての今後の課題であります、説明がありました。この件に関しまして、委員の皆さんから御意見等をいただければと思います。

なかなか、こうしたらいいというのは難しいですよ。いずれにしても、先生方の働き方改革といったものの中で取り組んでいかななくてはならない課題だと思います。どこまで地域移行ができるのかということも1つありますので、完璧にはなかなかできないと思いますが、それも含めてもし御意見があったらお聞かせいただければと思います。

○教育委員（増田克之） ちょっと聞きたいのですが、今年、未加入の子が御中 33、浜中 12 名の子がいますけれども、これは地域のクラブサッカーとか、浜岡にはシニアの野球もあったと思うのですが、あと御前崎はサーフィンやウィンドサーフィンをやっている子もいますけれども、そういう子たちが多いのでしょうか。

○教育総務課指導主事（澤入基裕） そういった子たちだけではなくて、自分で個人ピアノ教室に行ったり、勉強に専念したりという子供たちも増えてきています。

○教育委員（増田克之） おおまかに、クラブチームに参加している子が子供というのは生徒さんが、どれくらいいるのでしょうか。

○学校教育課長（古地 隆） 私が勤めていた昨年度の状況でいうと、御前崎中学校ではクラブ

チームに入っている生徒が40人ぐらいはいました。何らかの理由でボルダリングとか、そういった子がいたと思います。全校で1クラス強ぐらいです。そのときにはまだ全加入でしたので、地域でこういう活動をするから部活動に入りませんと書面でお願いをして、学校の部活動には入らなかったというケースだったのですが、そういうものがありました。ですから、浜岡中学校もそれぐらいはいたのかなと思います。

○教育委員（竹田和世） 質問よろしいですか、聞き逃していたらすみません。浜中が御中と合同でやっている部活、ソフトボール部とか女子バレーですが、それは平日の活動ですか。

○教育総務課指導主事（澤入基裕） 現在は、平日は各学校で活動をして、休日だけ集まってきて練習試合をしたり、合同で練習をしたりというふうに進めています。

○教育委員（竹田和世） では、そういうときの休日の送迎というのは、親御さんがされるのですか。

○教育総務課指導主事（澤入基裕） はい。

○教育委員（竹田和世） そうですね。ちょっと隣町と言っても遠いじゃないですか、この田舎って。だから、学校同士というのもちょっと難しいのかな、この先ね。少子化とか教師の働き方改革にこの流れというのが、すごくよく分かって、ごもつともなのですけど。先月の教育委員会の定例会の準要保護児童生徒の認定について、申請者からの理由の1つに部活の遠征費がかかるからという申請理由があったのですが、何かそれがずっと私には残っていて、部活の遠征費ってそんなにかかるものなのですか。

○教育総務課指導主事（澤入基裕） 部活動の遠征費というのは、ちょっと把握が難しいんですが、父母会でお金を集めてバスを借りるという場合もありますし、中体連の県大会等については予算がつけてあって、協会主催の大会だとそういうこともあります。合宿に行きたいということもあるかもしれませんが、近隣だと送迎を配車当番のような形を決めて行くということもあるのですけども、部活動や種目によって、そのあたりはまちまちなのかなとは思いますが、クラブチームと比較したら、かなり低いとは思っています。

○教育委員（竹田和世） それから、今、非行という意味ではとても落ちついているじゃないですか。そう思ったときに、放課後の過ごし方というのが、今後、またちょっと心配になるのではないのでしょうか。その生徒が、どのような放課後の過ごし方をするのか、クラブチームであるとか、部活であるとか、その辺もやっぱり把握していかないと、また新しい心配も出てきてしまうのかなとちょっと感じます。

○御前崎市長（柳澤重夫） この件に関しましては、こうしたらいいか、ああしたらいいかとは、なかなかこの場で申し上げるのも難しい話ではありますが、今後、そういったあらゆる角度から検討していただいて、よりよい方向性を探っていくということでもよろしいでしょうか。

○教育委員（松林義樹） 1つ質問です。

○御前崎市長（柳澤重夫） はい、どうぞ。

○教育委員（松林義樹） 中体連の動きというのですか、今後の動きというのは、読めるところというか、方向性は何か出ていますか。

○学校教育課長（古地 隆） 確実に分かっていることは、令和8年の夏の全国大会までは実施しますということです。

○教育委員（松林義樹） 令和8年までは。

○学校教育課長（古地 隆） はい。したがって、今の小学校6年生が入学するときの新入生説明会では、中体連の大会があるものですからね、当然、部活動はなくなるということは伝え

ることができるのですが、その以降についてはあるとも、継続するとも継続しないと言っていないものですから、それが非常にちょっと大きな影響を持つてくるのではないかと思っています。完全に中体連がなくなる、イコール、中学校で部活動を行う意味がないとは言いませんけれども、中学校体育連盟としては全国の主催大会がなくなるわけですので、協会ごとになっていくのかなとは思いますが。その情報はまったくありません。

○教育委員（松林義樹） 今年なのか来年なのか、クラブチームも県大会とか全国大会に中体連のほうへ参加できるっていうことがありましたが。

○学校教育課長（古地 隆） 今年からです。男子バレーボールには、藤枝市に藤枝リアンというクラブチームがあります。本市でも、浜岡中学校でも御前崎中学校でも生徒がそこに所属をして、県大会は、そのクラブチーム枠で出てきました。県内にあるクラブチーム同士の大会で1位になったものですから、静岡県の中体連県大会に出てきて、そしてなおかつ3位になったものですから、東海大会に出場しています。クラブチームとして、藤枝リアンというチームが。そういうような形も出てきています。

○教育委員（増田克之） よろしいですか。

○御前崎市長（柳澤重夫） はい、どうぞ。

○教育委員（増田克之） 本当にこれは、今までずっと中学校で部活というのを一手に引き受けてやっていたので、1番、特に戦後の大きな改革になるのではないかなと思っています。その中でやっぱり指導者の確保の非常に難しい面もあるだろうし、指導者の質の問題もあるだろうし、また、先ほども出ましたけれど保護者の負担、それによって、うんと格差が出てくる場合もあるのではないかなと。特に保護者の負担が増えて、とてもうちはそこまで送り迎えやお金は出せないから諦めてねと言って、せっかく力のある子やそういう子が参加できないという部分も、下手をするとあるなと考えます。ぜひ、その辺はまた行政でも、そういう場合、これからやっていく中で少し補助できるものなのかどうか、私では分かりませんが、そういう部分も含めて、ちょっと考えていただけたらと思います。子供たちによりよい機会を与えていく方向で、行政でも考えていただけたらありがたいなと思います。

○御前崎市長（柳澤重夫） 意見に関しましては、このようなことでよろしいでしょうか。

ありがとうございました。さまざまな御意見をいただきまして、今後の教育行政に生かしていきたいと思います。以上で本日の会議を終了させていただきます。事務局にお返しします。

○司会（教育部長 鈴木弘康） ありがとうございました。

協議の中では、さまざまな御意見をいただきまして、ありがとうございました。またこういった御意見を参考にしながら、取り組んでいきたいと思っています。

4 閉 会

○司会 それでは以上をもちまして、令和5年第1回御前崎市総合教育会議を閉会とさせていただきます。

最後に挨拶を交わしたいと思いますので、御起立ください。相互に礼。ありがとうございました。